中華民国初期の蔡元培と魯迅

吉　川　榮　一

はじめに

蔡元培は1868年1月11日浙江省紹興府山陰県城内の北のはずれに近い筆飛弄に生まれた。そこからほぼまっすぐに南に下っていくと、東昌坊口というところがある。魯迅はこの地に生まれた。蔡元培に遅れること13年余、1881年9月25日のことである。同じく紹興に生まれたこの二人の人物は、その活動分野こそ異なっていたが、ともに中国近現代史上に巨大な足跡を残している。二人の関係は、1912年の出会いから1936年の魯迅の死に至るまで、即かず離れずというものではあったが、交流が途絶えることはほとんどなかった。そんな彼らが出会い、職場をともにしたのが中華民国建国直後の草創期の教育部であった。拙稿では、蔡元培と魯迅の交流が始まった中華民国初期に焦点を絞って、歴史的事実を掘り起こしていきたい。

一　蔡元培による魯迅招聘

1912年1月1日中華民国が正式に誕生し、ついで1月3日南京に臨時政府が成立すると、蔡元培はその初代教育総長に任命された。当時は全てが手探り状態での出発であり、政府機構もまだ整っておらず、教育部についてもゼロからのスタートといってよい状態であった。教育部発足当時、職員は総長蔡元培、次長景耀月と会計員のわずか三名にすぎなかった。[注(1)] したがって、教育部が必要とする人材は、総長である蔡元培が個人的な人間関係を辿って探し求めていかなければならなかったのである。

蔡元培はまず、彼が清朝末期に組織した中国教育会以来の友人である蔣維喬

を南京に呼び寄せ、彼とともに教育部の組織構築に着手した。蔣の回想によれば、彼が南京にやってきた頃には教育部の所在地すらまだ決まっておらず、旅館に仮住まいという有様であったが、それからしばらくしてようやく内務部の二階を借りて教育部に充てることができたという。[註(2)] 魯迅はこのような状況の中で草創期の教育部に着任し、初めて蔡元培と相見えるわけであるが、紹介の労を執った許寿裳はその間の事情を次のように記している。

> 中華民国元年1月1日、臨時政府が成立し、南京を都と定め、蔡元培先生が教育総長に任ぜられた。当時は一切が初めてのことで、機構もまだ整っておらず、教育部内では食事と宿舎を支給し、一人あたりわずか三十元の月給が支払われるだけであった。私は蔡元培先生に南京に招かれ、各種の規則の起草にあたっていたが、仕事が忙しく手が回りかねる状況であった。そこで折を見つけて蔡先生に魯迅を推薦した。すると蔡先生は次のように言われた。「かねがねお名前は伺っており、ちょうど招請状を急いで出そうと思っていたところです。先生に——蔡先生は私のことをいつも許先生と呼んでおられた——私の代わりに手紙を書いていただき、すぐに上京してくださるよう丁重にお願いしていただきたい。」そこで私はすぐさま二通手紙を魯迅に書き送り、蔡先生が懇ろに招聘されている旨を伝えた。[註(3)]

当時魯迅は、上海に出て編集者にでもなろうと考えて、紹介された出版社からの返事を待っているところであったが、[註(4)] 許寿裳からの手紙を受け取ると南京行きを決意した。[註(5)] 魯迅の南京到着の確かな日時は不明であるが、許寿裳の回想では、魯迅の上京は蔡元培が袁世凱を南京に迎えるために北上する前であったというから、遅くとも1912年2月21日以前ということになろう。[註(6)] 上京した魯迅と蔡元培はこのあと「しょっちゅう顔を合わせる」[註(7)] ようになったのであるが、招かれた魯迅としては、蔡元培に対してどのような気持ちを懐いていたのであろうか。魯迅上京当時の情況を許寿裳は次のように伝えている。

> まもなく魯迅が上京し、私たちは再び顔を合わせ、故郷の革命の状況な

どについて話し合ったが、多くは滑稽でおかしなものであった。昼間は机をともにして仕事をし、夜には寝床を並べて話し合った。[註(8)]

革命が成功し、彼ら二人が待ち望んでいた共和国が誕生したばかりの頃である。当時三十歳そこそこだった魯迅と許寿裳が、前途に希望を抱き、無邪気な明るさを失っていない姿が、許の回想からも浮かび上がってくる。

民国元年のことを言えば、あのころは確かに光明にあふれていました。当時私も南京教育部にいましたが、中国の将来には希望があると感じていました。[註(9)]

後年こう回想しているとおり、中国の将来に希望を抱いていた魯迅であるから、新政府の一員として建国の大業に参与できたことを喜んでいなかったはずがない。魯迅にやや遅れて教育部入りした銭稲蓀は、教育部に入った頃を回想して「私はもともと杭州で働いていましたが、蔡先生が電報で私を招いてくださったときは嬉しく思いました」と語っているが、[註(10)]恐らく魯迅も彼と同じような喜びを感じていたことであろう。蔡元培がわざわざ自分を招いてくれたことに感激し、その厚意をありがたく思っていたに相違ない。

二　蔡元培はいつ魯迅の存在を知ったのか

魯迅にとって蔡元培は進士に及第した同郷の有名人であったから、早くからその名を知っていたことであろうが、蔡元培の側はいつ魯迅の存在を知ったのであろうか。先に引用した許寿裳の回想において、「かねがね魯迅の名前を耳にしていた」と蔡元培が語ったとあったが、いったいいつ蔡は魯迅の名前を知ったのだろうか。[註(11)]一つの手がかりは、魯迅の日本留学時代の友人沈瓞民の回想である。沈によれば、日露戦争中、広瀬武夫が旅順港を封鎖した頃、帰国を前にしていた沈を魯迅と陳師曾の二人が日比谷公園に誘ってくれたことがあったという。[註(12)]日露戦争当時、日本の政客たちが日本の満洲支配を正当化する言論を盛

んに吐いていたにもかかわらず、中国人留学生の中には日本を崇拝する者もいたが、魯迅はそんな留学生とは一線を画していたという。

> 魯迅は日本の侵略の野心に対し非常に憤り、同時に、蔡元培や何閬仙が上海で創刊した《俄事警聞》はこともあろうに日本に肩入れしてロシアを抑えようとしているが、これは実に将来を見る目がない意見だと指摘した。日本の軍閥は野心勃勃として下心を隠している、しかも日本は我が国と隣接しているから、もしツァーロシアが敗れれば、日本は一人東アジアに覇を唱え、中国人はもっと酷い目にあうだろうと魯迅は語った。[註(13)]

そこで魯迅は次のような意見を蔡元培らに伝えてくれるよう、沈に託したという。

（1）日本に肩入れするような主張を掲げてはならぬ。
（2）「同文同種」といった口先だけの論調で中国人を欺いてはならぬ。
（3）国際的な時事問題を真剣に研究するよう中国人に勧告しなければならぬ。

沈の回想によれば、「上海到着後すぐ魯迅の意見を蔡、何両氏に伝えた。その後《俄事警聞》は魯迅の意見を採り入れ、その主張を改めた。」という。[註(14)]

《俄事警聞》は、ロシアの東三省居座りに危機感を抱いた蔡元培・汪允宗らが、1903年12月15日に創刊した日刊紙であり、ロシアの脅威に対して注意を喚起することを目的としていた。[註(15)] 同紙は、翌年2月26日に紙名を《警鐘日報》と改め、1905年3月25日に当局により閉鎖されるまで発行を続けている。蔡元培は創刊当初から編集に関与しており、1904年春当時は編集長の任にあったから、[註(16)] 沈の回想にあるように魯迅の提言を蔡元培が受け取った可能性は充分考えられる。しかしながら、魯迅の提案を採用して《俄事警聞》が主張を変えたという確証は見出せない。ただ、もし日比谷公園の一件が日露開戦直後であり、沈が2月初めには帰国して蔡元培らに伝えたというのであれば、あるいは沈の

言うとおりであったかもしれぬと思わせる事実はある。《俄事警聞》最終号（1904年2月25日）に掲載された「俄事警聞之尾声」がそれである。

> 東三省の問題はさきにはロシアの独占時代であったが、今日では日露が相争う時代となった。独占時代においては、我が国民は専らロシア人に対処する方策を講ずればよかったが、日露相争う時代においては、我が国民は一方でロシア人に対処する方策を講じつつ、他方また日本人に対処する方策をも講ぜねばならない。これが、本社が明日より《警鐘日報》と改称する所以である。[註(17)]

たかだか一留学生の建議を取り入れたと考えるより、日露開戦という新事態に対応した改称と考えた方が妥当であるし、《警鐘日報》への改称が2月19日に既に予告されていることをも考えあわせると、[註(18)]魯迅の提言だけが大きく作用したとも考えにくい。現在のところ沈鈺民の回想以外には決め手となる証拠を欠き、事実の確定は困難ではあり、「上海到着後すぐ魯迅の意見を蔡、何両氏に伝えた。」と沈が書き残していることを指摘しておくにとどめるよりほかなさそうである。

蔡元培自身は、魯迅のことを意識したのはドイツ留学中であったと書き記している。

> 三十年前、私がドイツに留学していた頃、ドイツ語習得に困難を覚え、東京留学中の従弟・国親（蔡元康——引用者注）に手紙を書いたとき、この点にも触れた。国親が後に返事の中で、周豫才・豈明兄弟と話をした折、二人とも「最も肝要なのは優れた辞書を持つことだ」と語っていたと書いてよこした。これが、私が魯迅先生から教えを受けた最初である。[註(19)]

蔡元培は、1907年5月初めに中国を発ち、同年7月11日にベルリンに到着している。ベルリンで一年余りを過ごしたのちライプチヒに移り、1908年8月にライプチヒ大学に入学している。以後1911年10月武昌蜂起の消息に接して帰国

の途につくまで、大半をライプチヒで過ごしている。[註(20)] したがって、蔡元培がドイツ語習得の困難を蔡元康に訴え、元康から周兄弟のことを知ったのは、彼のドイツ到着まもないベルリン滞在中のことであろうと思量できる。この回想では、「教えを受けた最初である」と書いているだけで、初めてその名を知ったと書いていないのは、それ以前に既に蔡元康から周という名の友人のことを聞かされていたからかもしれない。蔡元康は日本留学中の魯迅と親しく往来していたから、彼を通して周豫才——魯迅のことを耳にしていたとしてもおかしくはない。また、1904年11月に光復会が上海で成立した際、蔡元培はその会長に就任し、一方の魯迅も同年末か翌年初めには光復会に加盟しており、[註(21)] しかも光復会の指導者陶成章や龔寶銓は二人の共通の知人であったから、周佳栄も指摘するとおり、光復会のつながりから蔡元培が魯迅の存在を知った可能性もある。[註(22)]

以上のように、中華民国成立以前すでに、蔡元培が魯迅の名（周豫才）を知る機会は少なからずあり、最も遅く見積もっても、蔡元培のドイツ留学初期には周豫才という青年の存在を知っていたことになる。

三　教育部社会教育司

魯迅が教育部に就職してまもない1912年２月21日、孫文の命を受けた蔡元培は、袁世凱を南京に迎える使節の一員として北上した。蔡は一ヶ月ほどで南京に戻ってきたが、その間留守を預かった景耀月が自分の縁故者を数多く教育部に引き入れたため、却って事務が混乱してしまった。この時すでに北京への政府移転が日程に上ってきていたこともあり、蔡は南京の教育部をいったん解散することにした。[註(23)]

こうして、1912年３月22日、南京臨時政府教育部は解散し、北京移転の準備が始まったが、魯迅や許寿裳は新たに組織される北京政府の教育部にそのまま移ることになった。一方蔡元培は、南京臨時政府解散に際して教育総長辞任を再三申し出ていたが、結局受理されず、1912年３月29日、唐紹儀新内閣の教育総長に再任された。

魯迅は一時帰郷ののち、同年5月北京に上った。南京教育部に入って以来の魯迅は、部内のごたごたや政治状況の転変のうちに慌ただしく日々を送っていたが、約三ヶ月間の南京教育部時代はまだ部内の組織や職掌分担も確立していない状況であったため、魯迅が本格的に職務に取り組むのは教育部の北京移転以後のことであった。[注(24)] 彼は1912年5月6日から北京の教育部に出仕したのであるが、それに先立つ5月3日、社会教育司第二科員に任命されている。[注(25)] 社会教育司第二科というのは、博物館・図書館・美術館などを管理したり、音楽会・展覧会・演劇などを管掌するのが主たる職務であり、いわば文化・芸術・科学の分野を担当する部局であった。[注(26)]

社会教育司は、清朝時代の教育部に相当する「学部」にもなく、教育部の官制創設に影響を与えた日本の文部省にもない、全く新しい組織であり、蔡元培の主張によるものであった。銭稲蓀はその間の事情を次のように語っている。

> 社会教育司は新設の組織です。当時教育部内の多くは日本留学経験者だったので、日本の教育機構に学んだり、日本の方法を参考にしたりすることが多かったのですが、日本には社会教育司という組織はありませんでしたから、これは新たに創設されたものなのです。この創設は蔡先生の主張でした。蔡先生は西欧各国を歴訪されたことがあり、また「美育」を主張しておられたので、社会教育司を設立され、さらに豫才をその任に充てたのです。社会教育司第一科は、図書館・博物館を主管するものですが、こうした仕事は当時理解できる人がいませんでした。[注(27)]

蔡元培自身も、「私は成人教育と補習教育を提唱するために社会教育司増設を主張した」と後年語っているが、[注(28)] その社会教育司の中でも、魯迅の配属された第二科は、蔡元培の教育理念から考えて重要な意味を持った部署だったのである。というのは、蔡元培にとって「美育」こそが、彼の教育理念の要の位置を占めるものだからである。[注(29)] 蔡は教育総長に就任してまもなく、「對於新教育之意見」を発表し、自らの教育理念を宣明した。[注(30)] この中で蔡は、軍国民教育・実利主義教育・道徳教育・世界観教育・美感教育の五つの柱を立て、それぞれ

の位置づけについて説明を加えているが、その後、自らこれを要約して次のように語っている。

> 教育界で提唱されている軍国民教育と実利主義は、もとより時局の困難を克服するために必要ではあるが、公民道徳教育を中核とせねばならない。公民道徳を育まんと欲するならば、哲学上の世界観と人生観を身に付けさせねばならない。そして、これらの観念を涵養するには、美育を重視しなければならないのである。[註(31)]

このように蔡元培は美育を自らの教育理念の根幹に据えていたのである。それゆえ、文化・芸術を担当する社会教育司第二科（のちの第一科）は、教育部の官制の中では学校教育を直接管掌する部署等よりも下位に位置づけられていたかもしれないが、蔡元培にとっては他の部署にもまして重要な役割を担っていたと言えるだろう。その社会教育司第二科の中心に魯迅を据えたのは、蔡が魯迅のこうした方面に関する見識を買っていたからである。[註(32)] 銭稲蓀の回想にもあったように、その当時、図書館や博物館を扱う仕事をこなせる人材に乏しいなか、蔡は魯迅の造詣の深さを知って白羽の矢を立てたに相違ない。許寿裳は次のように述べている。

> このような教育方針（前述の、美育を要とする蔡元培の教育方針——引用者注）を、その当時理解できる者はやはり寥々たるものであったが、魯迅は深くその意図を理解していた。魯迅が美学や美育を研究し知識の豊富なことを蔡先生も知っておられたので、魯迅に社会教育司第一科科長を担当させ、図書館・博物館・美術館等に関する事項を主管させたのである。[註(33)]

許寿裳のこの回想の裏付けとなる事実がある。1912年夏、教育部主催の夏期講演会において、魯迅は「美術略論」と題した連続講演を行っているのである。[註(34)] この夏期講演会では、許寿裳も「教育学」と題して講演に参加しているが、ほかには、厳復が「進化天演」、章炳麟が「東洋哲学」を講ずるなど、なかな

か錚々たる顔ぶれであった。[註(35)] 魯迅と許寿裳は、社会教育司、普通教育司という各自の部署と関わりのある演題とは言え、当時まだ三十歳前後だった彼らが、厳復や章炳麟といった大物と並んで演壇に上がるというのは、異例のことではなかったろうか。

魯迅について言えば、芸術を管掌する職にあったとはいっても、芸術家でも研究者でもなく、一官吏にすぎない。そんな魯迅が「美術略論」を担当したのであるから、魯迅の芸術についての造詣の深さが、蔡元培を含め教育部内部で広く認められていたことの証と言えよう。そもそも、「美術略論」という題目であれば、蔡元培自らが演壇に立ってもおかしくはない。蔡元培は美術や美学に造詣が深く、しかもライプチヒ大学留学中には「とりわけ実験心理学と美学を重視していた」と自ら語っているように、美学について専門的に学んだ経験まであるからである。[註(36)] 事実、のちに北京大学校長の任にあったとき、「美学」担当教官がいなかったため、蔡元培自らが一時期教壇に立っている。[註(37)] 夏期講演会当時、蔡元培は袁世凱に反対して教育総長を辞任しようとしており、講演どころではない事情があったにせよ、芸術についての見識の高さでは、魯迅が蔡元培に次ぐ存在として教育部内で認められていたことは明らかであろう。

魯迅の講演は、6月21日に始まり、28日、7月5日、10日、17日と続けられたが、残念ながらその内容は伝わらない。[註(38)] しかし、翌年2月に発表された「擬播布美術意見書」から、当時の魯迅の芸術観の一端を窺い知ることができる。[註(39)] 魯迅はまず、「美術」を「天物（自然）」「思理（思惟）」「美化」の三要素からなると定義した上で、「美術」をいくつかに分類し、ついで「美術」の効用を説き、最後に「美術」普及の方策を列挙している。このなかで、魯迅の主張が強く表れているのは「美術」の効用についての部分であろう。魯迅は、「美術」の真諦は真・美を発揚し人情を楽しませることにあり、それが役に立つというのは予期せざる成果であるとした上で、一、文化を表現する：二、道徳の助けとなる：三、経済の助けとなる、という三つの効用を挙げている。同じ時期の蔡元培が、「美感は美麗と尊厳を合わせて言ったものであり、現象世界と実体世界の間の懸け橋となるものである」という具合に、専ら観念的に捉えていたのとは、いささか異なった見解と言えるだろう。[註(40)] 文化の伝承や経済効果にも言

及している魯迅の方が、より柔軟な見方をしている。この時期の蔡元培の芸術観や美学観を伝える資料が少なく、両者の違いを詳しく論ずることはできないが、二人の芸術に対する見方は必ずしも一致していたわけではなさそうである。

四　蔡元培の教育総長辞任

ちょうど魯迅が「美術略論」の講演を開始した6月21日、蔡元培は教育総長辞任を申し出ている。これは、権力をほしいままに振るい始めた袁世凱に反発して国務総理唐紹儀が離職したのに続くもので、蔡元培のほか宋教仁、陳其美ら同盟会系の総長（国務大臣）四人が一斉に辞表を提出している。[註(41)] このときは袁世凱に慰留されたが、7月1日再び辞表を提出し、翌日宋教仁ら他の総長と連れだって総統府に出向き、袁に直接辞意を伝えた。袁世凱は慰留に努めたが、蔡らの辞意は堅く、ついに7月14日正式に辞表が受理された。[註(42)]

魯迅は、蔡元培辞任の消息に無関心ではいられなかった。彼の日記にはその都度、「6月22日：蔡総長元培於昨日辞職。7月2日：蔡総長第二次辞職。」という具合にそのことが記されている。[註(43)] 魯迅にとって、自分を教育部に招いてくれた蔡元培の進退問題は、上司の首のすげ替えという以上の意味があったに違いない。7月10日と19日の二回、魯迅が許寿裳とともに蔡元培の寓居まで出向いている事実も、単なる上司と部下という関係を超えた親身な気遣いを感じさせる。[註(44)]

もとより、官吏にとって、その官署の首脳の交代は重大事である。教育部についてみれば、清末の「学部」以来の官員と、南京臨時政府から移ってきた官員との寄り合い所帯であったから、蔡元培の総長辞任は両者の勢力の均衡を破る一大事件であったはずである。教育部内では、蔡元培の辞任をめぐって慌ただしい動きがあったことであろう。先に触れた夏期講演会の状況からもその一端を知ることができる。

6月21日の魯迅の第一回目の講演には三十人近くの聴衆が集まったが、蔡の総長辞任がほぼ確定的となった7月5日第三回には、聴衆が一人も現れなかったばかりか、魯迅以外の講師は全て欠席している。[註(45)] 晩年の魯迅とともに暮らし

ていた許広平は次のように記している。

> 旧社会の政治は人次第であったから、一人の長官の任免が彼の役所の一切の行動に関係した。たとえば「美育」の提唱は蔡元培がリーダーシップをとったものであったから、彼が総長になると部内で「夏期講演会」が開催され、魯迅に「美術略論」の講演をさせた。最初の講演は6月で、「聴衆三十人、中途退出者五．六人」であったものが、7月5日の第三回講演会の時には、魯迅が時間通りに行ってみると、「講師はみな欠席、聴衆も一人もなし」になってしまった。7月2日の蔡総長の第二次辞任という消息が既に人々に知れ渡っていたからである。[註(46)]

許広平も言うとおり、蔡元培の教育総長辞任が直ちに教育行政に反映する結果となった。折しも開かれていた臨時教育会議において、かねてより蔡元培が主張していた「美育」が教育方針から削除されるという動きがあったようだ。魯迅は7月12日の日記に、憤懣やるかたない様子で次のように記している。

> 臨時教育会議がついに美育を削除したという。かかる豚犬どもは実に哀れなものだ。[註(47)]

彼の日記からは、魯迅が蔡元培の主張を支持していたことがよくわかる。「削除云々」について、当時同僚であった銭稲蓀はこう回想している。

> 会議（臨時教育会議——引用者注）でも美育について討論しましたが、美育とは結局どのようにしたらよいのか誰もわかるものがいませんでした。それで削除されたのです。当時、私も魯迅も大変残念に思いました。[註(48)]

実際には、のちに削除されたのは「美育」ではなく、「世界観教育」の方であったのだが、魯迅の日記や銭の回想がいずれも「美育」を削除したと記しているところを見ると、臨時教育会議において「美育」を教育方針から外そうと

する動きがあったに相違あるまい。[註(49)]

さて、魯迅や許寿裳、銭稲蓀ら、南京臨時政府以来の教育部員たちには、清朝の「学部」から横滑りしてきた旧教育官僚とは違うのだという自負があったことであろう。彼らの拠り所ともいうべき蔡元培が辞任し、「学部」出身の范源廉が実権を振るうことになるのは、魯迅らにとっては大きな不満であったに違いない。蔡元培辞任当時、教育部内にどのような反目や不和があったのか、今日では最早知るすべもないが、一つだけ当時の不協和音を感じさせる事実がある。魯迅日記によれば、1912年7月15日の項に次のように記されている。

> 午後、部員、蔡総長のため送別会を開く。出席せず。[註(50)]

銭稲蓀の回想でも、それは裏付けられる。

> 教育部員たちの蔡先生歓送会には私は参加しませんでした。魯迅も参加しませんでした。[註(51)]

魯迅たちが蔡の進退に無関心ではなかったことは先に述べたとおりである。その彼らが7月15日の送別会に出席しなかったのは、教育部内の形式だけの送別会に反発を感じたからであろう。蔡元培を送る内輪の集まりを親しい仲間だけで別に設けていた事実が、魯迅たちの当時の心情を物語っている。

> （7月22日）夜、陳公猛の家で飲む。蔡孑民のための送別である。ほかに蔡谷清、兪英厓、王叔眉、季市、それと私。酒肴は全て精進料理。[註(52)]

教育部の蔡元培送別会には出席しなかった魯迅が、同郷の友人たちだけで蔡元培のための送別の宴を張っているのである。しかも、肉料理や魚料理を排して、酒肴を全て精進物にしている点に、魯迅らの思いの深さが表れている。なぜなら、蔡元培は菜食主義者であったからである。蔡はライプチヒ留学中、友人の李石曾から肉食の害を聞き、またトルストイの著作から狩猟の惨状を知り、

ついに肉食を絶ち、周囲にも菜食を勧めていた。[註(53)] 蔡元培の菜食主義を知っていた魯迅たちは、蔡元培に対する敬意をこんな形でも表現していたのだと言えるだろう。

教育総長を辞任した蔡元培は、1912年9月、妻子を伴ってヨーロッパに旅立ち、魯迅との交流が再開するのは1916年末に蔡が帰国してからのことになる。[註(54)] 魯迅が教育部で蔡元培とともにあったのは、正味わずか三ヶ月余りにすぎなかったが、蔡元培の高潔な人柄や理想を掲げ原則を貫こうとする毅然たる態度に深く感ずるものがあったであろうことは間違いない。竹内好は、「彼（蔡元培を指す——引用者注）の正義感と、自尊心と、奮励努力とに魯迅が敬意を払い、それが魯迅の生得の気質を励ましたであろうことは、疑われない。」と、[註(55)] 教育部時代の蔡元培が魯迅に与えた影響を総括しているが、竹内のこの評価は十分首肯しうるものと言えよう。魯迅が蔡元培に対して抱いた敬意は、これ以後時期により多少の動揺が生ずることはあったものの、蔡元培という人物に対する評価の基調として魯迅の終生を通して貫かれていくことになるのである。その後の蔡元培と魯迅との関係については稿を改めて詳しく論じていきたい。

註

（1）李新主編『中華民国史　第1編　中華民国的成立（下）』461頁；中華書局、1982年4月。なお、孫瑛『魯迅在教育部』に記すところでは、「当時、総長蔡元培、次長景耀月が任命されただけであり、ほかに会計員1名が配属されたものの、ほかには誰もいなかった。蔡元培は個人的な関係を通じて蔣維喬に秘書長に任命し、彼らはこうして教育部創設に取り組み始めた。」とある。（1頁：天津人民出版社、1979年8月）いずれにせよ、ごく少数のスタッフから教育部創設事業が始まったことには変わりはない。

（2）蔣維喬「辛亥革命聞見」：中国近代史資料叢刊『辛亥革命』第8冊、57～61頁、1957年7月初版、1981年5月第4刷。原載『越風　辛亥革命紀念特号』。なお、王爾畅「魯迅在南京教育部若干史実考証」（『中国現代文芸資料叢刊8』；1984年7月）によれば、内務部ではなく実は外務部の二階であったようである。

（3）許寿裳『亡友魯迅印象記』；人民文学出版社、1977年12月。32頁。

（4）復旦大学・上海師範大学・上海師範学院〈魯迅年譜〉編写組『魯迅年譜　上冊』：安徽人民出版社、1979年3月。95頁。以下、安徽版『魯迅年譜』と略称。

（5）魯迅「范愛農」（『朝花夕拾』所収）「季茀写信来催我往南京了。……決計往南京。」

とある。『魯迅全集』第２巻；人民出版社、1981年、315頁。

（６）許寿裳前掲書に、「不久、魯迅来了、……中略……後来蔡先生被命北上、迎接袁世凱去了。」（32頁）とあり、高平叔撰著『蔡元培年譜長編　上』（人民教育出版社、1996年３月）によれば、蔡元培が北上の命を受けたのが２月18日、上海から船出したのが２月21日であった（407～409頁）。

（７）蔡元培「記魯迅先生軼事」；中国蔡元培研究会編『蔡元培全集』第８巻、425頁；浙江教育出版社、1997年12月。以下『蔡元培全集』と略称。

（８）許寿裳前掲書、32頁。

（９）魯迅の1925年３月31日付け許広平あて書簡。『魯迅致許広平書簡』；河北人民出版社、1980年１月、12頁。

（10）「訪問銭稲蓀記録」；『魯迅研究資料４』、天津人民出版社、1980年１月、197頁。

（11）当時まだ「魯迅」という筆名を使っていない以上、本来なら周樹人あるいは周豫才と記すべきであろうが、必要のない限り全て「魯迅」という呼称を用いることにする。

（12）沈駅民「魯迅早年的活動点滴」：『魯迅回憶録』一集、上海文藝出版社、1978年１月初版、222～223頁。原文は「那時日俄戦争開始、広瀬武夫沈船封鎖旅順。……」である。安徽版『魯迅年譜』や人民文学出版社版『魯迅年譜』（1981年９月）では、この一件を1904年２月中の出来事としているが、広瀬武夫が戦死して一躍その名を世間に轟かせたのは３月末のことである。旅順港閉塞作戦は、２月24日に第一回、３月27日に第二回、５月３日に第三回の計三回実施されたが、このうち広瀬が参加したのは第一回、第二回の二度である。３月27日の第二回閉塞隊に、広瀬は福井丸を指揮して参加し戦死を遂げている。広瀬が日露戦争最初の軍神として世に知られるようになったのは戦死後のことであるから、沈の回想が正しければ３月下旬以降の出来事ということになろうが、五十年以上のちの回想でもあり、有名な広瀬中佐のエピソードが記憶に残っていたため広瀬の名を出しているだけかもしれない。もし仮に、広瀬武夫云々が沈の記憶の混同だとすれば、この年の２月16日が旧暦の元旦にあたっていることを考えあわせると、春節を家族とともに過ごすために２月上旬に沈が帰国するということは充分考えられることではある。『日本近現代史辞典』（東洋経済新報社、1978年４月）、『記録現代史　日本の百年　④明治の栄光』（筑摩書房、1978年２月改訂新版）を参照。

（13）沈駅民前掲文、223頁。

（14）前註に同じ。

（15）「本社廣告」；《俄事警聞》1903年12月15日；羅家倫主編『中華民國資料叢編　俄事警聞』、中央文物供應社影印本、1968年９月。

（16）高平叔編著『蔡元培年譜』、中華書局、1980年２月、19頁。

（17）「俄事警聞之尾声」；《俄事警聞》1904年２月25日。なお、前掲『蔡元培全集』第１巻に、「《俄事警聞》改為《警鐘》之原因」の題名で、蔡元培執筆として収録されている。（438頁）

（18）「《俄事警聞》改刊広告」；《俄事警聞》1904年２月19日。

（19）前掲「記魯迅先生軼事」：『蔡元培全集』第８巻、425頁。

（20）前掲『蔡元培年譜長編　上』、328～342頁。

（21）前掲、人民文学出版社版『魯迅年譜』第１巻、146～７頁。

（22）周佳栄「魯迅與蔡元培」；《抖擻》第46期、1981年９月、香港。なお、周佳栄は、周作人と蔡元培の関係をも挙げている。「蔡元培任紹興學務公所總理、曾託人魯迅的二弟周作人“去幫他的忙”、周作人不願意休學、便謝絶了。」（60頁）

（23）前掲『蔡元培年譜長編　上』、423～425頁。及び、許寿裳前掲書、33頁。

(24) 孫瑛『魯迅在教育部』、6～7頁、及び人民文学出版社版『魯迅年譜』第1巻、258～260頁。
(25) 人民文学出版社版『魯迅年譜』第1巻、260頁。
(26) 許寿裳前掲書36～7頁、孫瑛前掲書14～19頁。なお、1912年8月26日、魯迅は社会教育司第一科科長に任命されているが、これはもとの第一科が内務部に移ることになったため、もとの第二科が第一科に改められただけであり、担当する職務内容に変更はなかった。次註で引用している銭稲蓀の回想で「第一科」となっているのはそのためである。
(27) 前掲「訪問銭稲蓀記録」：『魯迅研究資料4』、200頁。
(28) 蔡元培「我在教育界的経験」：『蔡元培全集』第8巻、508頁。
(29)「美育」は強いて日本語に翻訳すれば、「美的教育」なり「芸術による教育」、あるいは「情操教育」ということになろうが、ここでは「美育」という中国語の原文のまま用いることとする。
(30) 蔡元培「對於新教育之意見」：『蔡元培全集』第2巻、9～19頁。1912年2月8、9、10日《民立報》に掲載されたのを皮切りに、《教育雑誌》第3巻11号（2月10日）、《東方雑誌》第8巻第10号（4月）等にも掲載された。なお、「對於新教育之意見」は、のち「對於教育方針之意見」と改題された。
(31) 蔡元培口述、黄世暉記「蔡孑民先生傳略」：『蔡孑民先生言行録』、21頁。新潮社、1920年。文海出版社、1973年影印本。
(32) 魯迅が第一科科長に任命されたとき、蔡は既に教育総長を辞任していたが、それまで科の中心にいたからこそ魯迅が科長に任命されたと考えてよいだろう。
(33) 許寿裳前掲書、36～7頁。
(34) 人民文学出版社版『魯迅年譜』第1巻、265～6頁。及び、孫瑛前掲書、23～25頁。なお、ここで言う「美術略論」は日本語に翻訳すれば「芸術論」とでも言うべきものであり、中国語の「美術」は、日本でいう「美術」より含まれている範疇は広い。
(35) 前注に同じ。
(36) 前掲「蔡孑民先生傳略」；『蔡孑民先生言行録』19頁。
(37) 蔡元培「我在北京大学的経歴」；『蔡元培全集』第7巻、507頁。
(38) 魯迅「壬子日記」；前掲『魯迅全集』第14巻、7～10頁。なお、7月5日は、講師が来ず、聴衆もいなかったため中止された。
(39) 魯迅「傑播布美術意見書」；前掲『魯迅全集』第8巻、45～50頁。なお、原載は《教育部編纂処月刊》第1号第1冊（1913年2月）である。
(40) 前掲「對於新教育之意見」：『蔡元培全集』第2巻、13頁。
(41) 前掲『蔡元培年譜長編　上』、459頁。
(42) 前掲『蔡元培年譜長編　上』及び劉紹唐主編『民國大事日誌』第1冊、19頁（傳記文學出版社、1978年5月再版）。
(43) 魯迅「壬子日記」；『魯迅全集』第14巻、6頁、8頁。
(44) 前註に同じ。9、10頁。
(45) 註（43）に同じ。
(46) 許広平「魯迅回憶録・北京時期的読書生活」；馬蹄疾輯録『許広平憶魯迅』、広東人民出版社、1979年4月、611頁。
(47) 魯迅「壬子日記」：『魯迅全集』第14巻、9頁。
(48) 前掲「訪問銭稲蓀記録」：『魯迅研究資料4』、212頁。
(49) 1912年9月2日に教育部が公布した「教育宗旨」は「道徳教育を重視し、実利教育・軍国民教育をもってこれを補い、さらに美感教育をもってその道徳を完成させる」と

なっており、蔡元培の主張のうち「世界観教育」だけが抜け落ちている。舒新城編『中国近代教育史資料』上冊、226頁。人民教育出版社、1961年初版、1980年8月第7次印刷による。

(50) 注（44）に同じ。

(51) 注（48）に同じ。

(52) 注（44）に同じ。なお、季市すなわち許寿裳以外の出席者は、教育部とは直接関係のない、魯迅や蔡元培と同郷の紹興出身者である。

(53) 前掲、「蔡孑民先生傳略」；『蔡孑民先生言行録』20頁。

(54) 蔡は1913年6月から9月まで一時帰国したが、第二次革命の慌ただしい時期でもあり、魯迅と何らかの交渉があったことを窺わせる史料は見いだせない。

(55) 竹内好「蔡元培からみた魯迅」；『竹内好全集』第2巻、203～4頁。筑摩書房、1980年。

（よしかわ　えいいち・中国近現代文学）